

《記紀に隠された史実を探る⑥》

# 「任那日本府」とは何か

## ～朝鮮半島における倭人の勢力～

飯田眞理

### 【はじめに】

旧石器・縄文時代から、日本列島に伝わった諸文化の主たるルートは、朝鮮半島経由であることは自明である。特に弥生時代以降における北部九州と朝鮮半島南部の共通する遺物からは、人々が頻りに海を渡っていたことを示している。その後の古墳時代にも多くの渡来人がやってきたことが記紀に記されている。このような列島と朝鮮半島の古代における関係のなかで、今回の拙文は、日本書紀に記す「任那」と『日本府』に絞ったものである。日本書紀においては、神功 49 年に「比自牝、南加羅、喙国、安羅、多羅、卓淳、加羅などの七カ国を平定した。」と記されている。ここから、ヤマト王権が任那を支配するようになった始まりとする。しかし、これは歴史的事実ではない。もっと古い時代から朝鮮半島南岸部に倭人が居住していたことが考古資料と文献から明らかになっている。「任那」と倭との関係については、戦前から多くの説が出されてきた。筆者が様々な史料を検証したが、得られた結論は次のようなことである。「倭国は任那（伽耶諸国）の倭人勢力を通じて伽耶諸国に対する宗主的な影響力を持っていた。」「百済への 4 県などの割譲が任那（伽耶諸国）が新羅に併合される誘因となった。」「日本書紀に記す『日本府』はヤマト王権の出先機関ではなく、安羅の倭人組織であった。」

## 1. 任那とはどの地域のことか

★任那といえば「任那日本府」を思われるが、任那は決して日本書紀だけの地名ではない。中国と朝鮮の史料に多く記されている。任那と地域としては、狭義と広義の意味で用いられている。狭義としては、現在の慶尚南道金海市に存在した狗邪韓国＝金官国のことである。広義は、金官国を中心とする伽耶諸国を指す。日本書紀には、狭義のときと広義のときがある。以下にその史料を記す。

### (1) 中国・韓国の文献、および金石文

#### ①『宋書・夷蛮伝』

\*元嘉 15 年（438 年）

「倭王讚没し、弟珍立つ。この年、宋に朝献し、自ら、倭王讚死弟珍立自稱使持節都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓 六国諸軍事安東大將軍倭国王」と称する。

任那は秦韓・慕韓と並列して記されているので、任那は弁韓にあたる広義として記されたと考えられる。

\*元嘉 28 年 (451 年)

宋朝・文帝から「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事」を加号される。  
百済の代わりに加羅が加号されているので、①と同様に任那は広義である。

②『三国史記・列伝卷 46・強首伝』 「臣本任那加良人」

任那加良とは金官国のこと、狭義である。

③広開土王碑

「・・自倭背急追至任那加羅從拔城城即歸服安羅人戍兵拔新羅城」

(訳文: ・・倭軍の背後を急追し、任那加羅の從拔城へ至り城は帰服したが、安羅戍兵が新羅城を抜いた・・)

任那加羅は②と同様に金官国のこと、狭義である。

④韓国・新羅眞鏡大師塔碑銘

「大師諱審希俗姓新金氏其先任那王族草拔聖枝每苦隣兵投於我國遠祖興武大王・・・」

これも金官国のこと、狭義である。

⑤翰苑・新羅条 (649 年 - 683 年成立)

和訳文: 「新羅の古老の話によれば、加羅と任那は新羅に滅ばされたが、その故地は新羅国都の南 700~800 里の地点に並在している。」

(『通典』(801 年成立)・『太平御覧』(983 年成立)・『冊府元龜』(1013 年成立) にもほぼ同様の内容が記述されている。

(『通典』北宋版 邊防第一東夷 新羅)

「(新羅)・・遂致強盛因襲因襲加羅任那諸國滅之、並三韓之地・・」

これは広義と解釈できる。

★以上のように任那は、おおむね朝鮮史料では狭義の金官国として、中国史料では弁韓 (伽耶諸国) の広義の意味で用いられている。

## (2) 任那の意味と読み

★任那の語源は、『三国遺事』所収の『駕洛国記』に見える首露王の王妃 (許黄玉) が船で着いたとする聖地の「主浦」村の朝鮮語の訓読み (nim-nae=ニンナエ) であることが通説になっている。

(井上秀雄『倭・倭人・倭国』人文書院 1991)

また日本語の「ミマナ」は「ニンナエ」が音節変化したものとされる。これについては、筆者も同意するものである。また、「任那」は本来狭義の意味で、金官加羅国 (魏志倭人伝に記す狗邪韓国の後裔国) の国内名であったと推測される。新羅も国内的には鷄林であり、倭国も国内的にはヤマトといったと同様である。ところがその任那はその後、伽耶諸国の広義の意味でも用いられるようになったのだろう。

## 2. 朝鮮半島南岸地域は倭人の居住地だった

この章の内容は、古代史ネット第3号の「河村哲夫著 『奴国の時代②・朝鮮半島南部の倭人の痕跡』」に詳しく記されているが、任那を語るとき避けることが出来ないので、筆者が調べたことを述べる。

### (1) 考古学からの列島と朝鮮半島との関係

★朝鮮半島と日本列島とは、縄文・弥生時代から古墳時代まで長期にわたり、互いに文化の交流が頻繁に行われていたことが考古史料より判明している。単なる交流ではなく、朝鮮半島と北部九州とは互いに人の移動があった。つまり、朝鮮半島からの北部九州へ移住と北部九州から朝鮮半島への移住があったと考えられる。そして、倭人が朝鮮半島に居住していたことは間違いない。

#### ①朝鮮半島の倭系遺物

【縄文時代】 東三洞貝塚（釜山）など

◆九州の縄文土器と櫛目文土器の関係



\*考古学の江坂輝弥氏によれば、模様の共通性だけでなく、滑石や石綿を混ぜた土器生地にも共通性が認められ、櫛目文系土器が西北九州地方に波及して曾畑式土器が成立したと見做して差し支えないとしている。(Wikipedia)

◆貝殻製の面

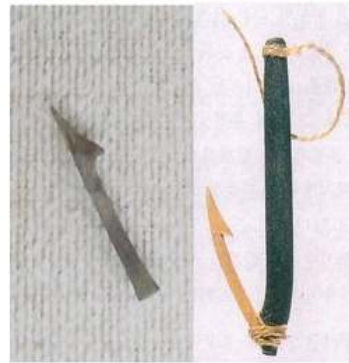
\*祭りの道具と考えられる貝面が、韓国東三洞貝塚と縄文中期の熊本県有明海沿岸で出土している。材料は違うものの、作り方には共通性が認められる。



◆九州産の黒曜石と結合式釣り針



腰岳黒曜石で作られた鏃  
(東三洞貝塚)



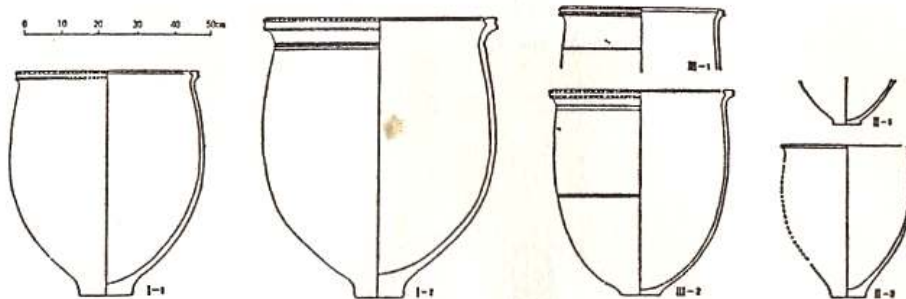
日本出土骨針(左側)と  
烏山里出土結合式釣り針

【弥生時代(原三国時代)】

(柳田康雄 『伽耶はなぜ滅んだか・倭と伽耶の文物交流』 大和書房 1991年) より引用

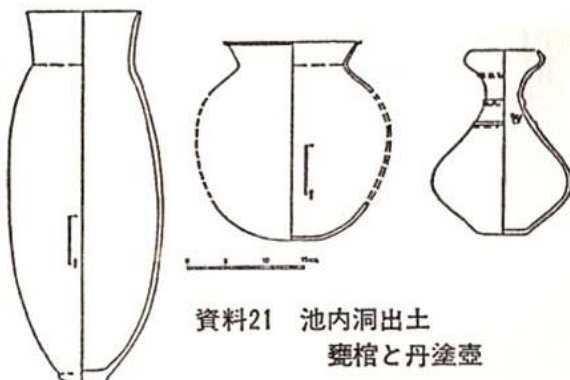
◆金海貝塚・鳳凰洞遺跡(資料 20)

- \*1934年 年支石墓 1+石棺墓 5+甕棺墓 3+竪穴住居址+炉址+石の堤防が出土  
この甕棺が後に**金海式甕棺**とされることになる。弥生前期末頃(BC1~2世紀)
- \*金海式土器は対馬、壱岐、北部九州でも出土している。

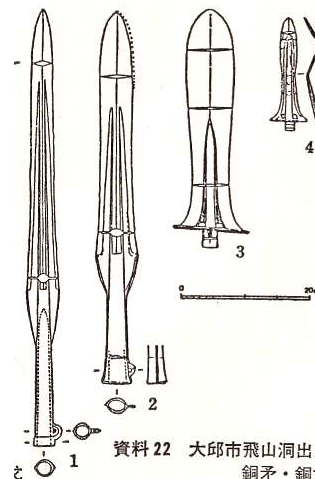


資料 20 金海貝塚甕棺

◆丹塗磨研の土器(資料 21)・中広銅戈、広型銅矛(資料 22)



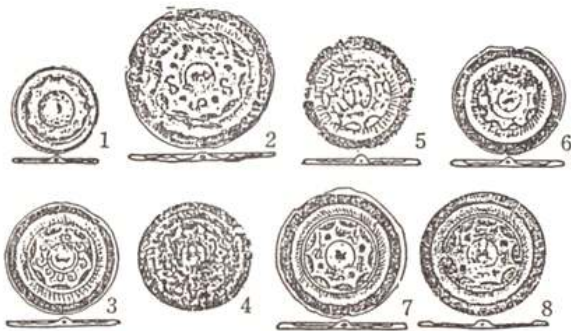
資料 21 池内洞出土  
甕棺と丹塗壺



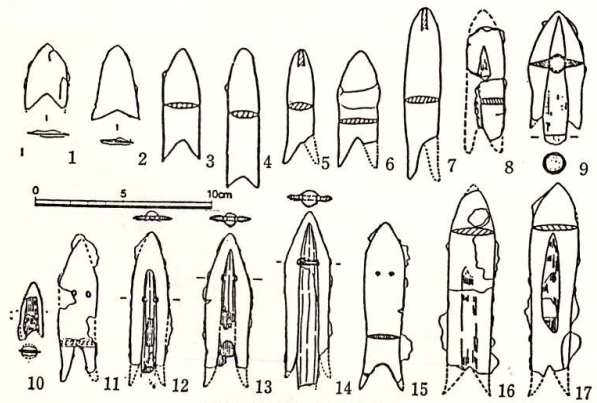
資料 22 大邱市飛山洞出土  
銅矛・銅戈



◆小型仿製鏡(資料 24)・ 無茎鉄鏃(資料 25)



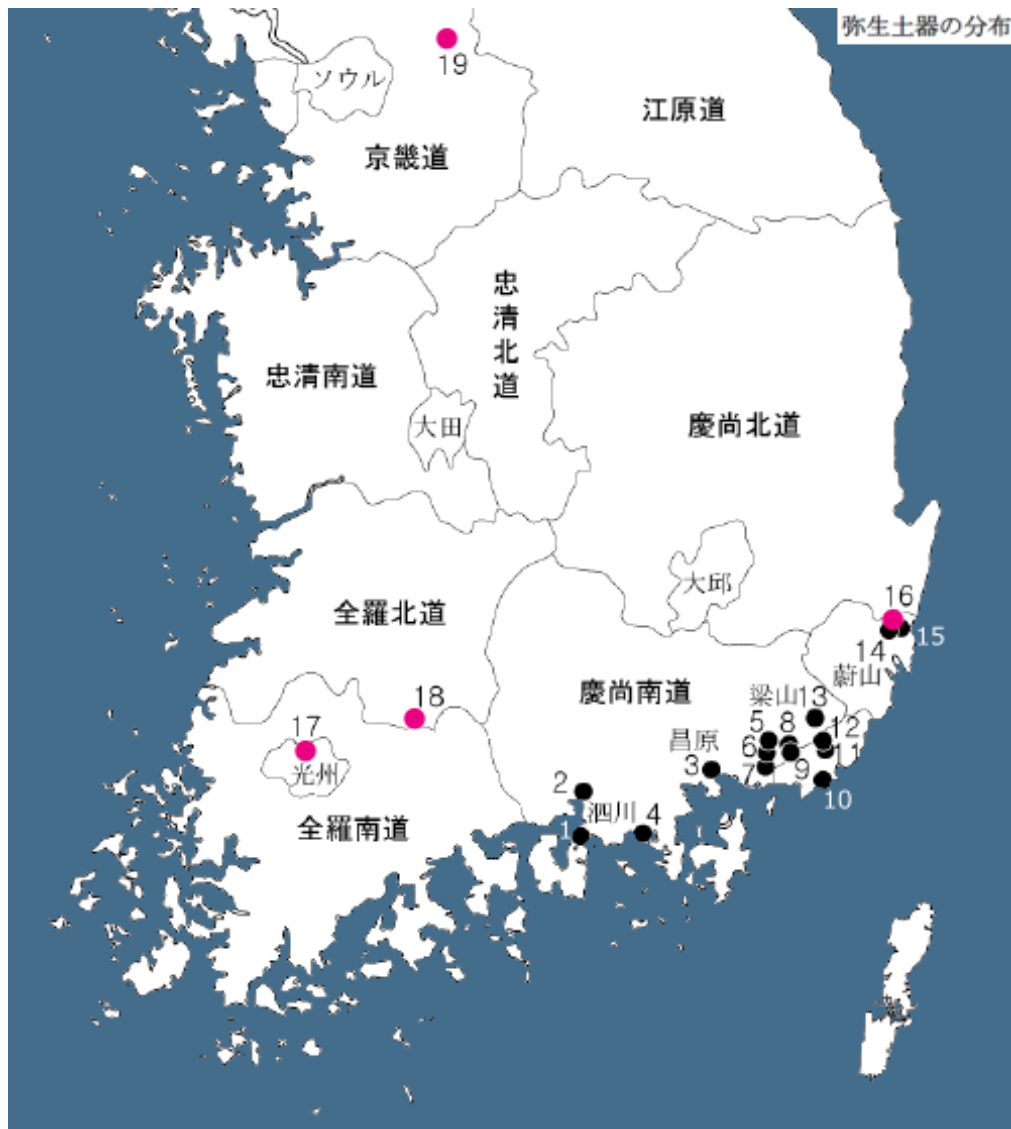
資料 24 韓国出土小形仿製鏡と同范鏡  
 1～3・7—出土地不明(国立慶州博物館)、4—濟州市健入洞、  
 5—沙内里、6—伝金海市良洞里、8—佐賀県磯石



資料 26 無茎式鉄鏃実例図  
 1・2—福岡県上川原、3・4—芦浦里42号、5～7—龍潭洞、8・9—老圃洞3号、  
 10・11—老圃洞41号、12～14—老圃洞33号、15—礼安里136号、16・17—三東洞27号褒栝墓

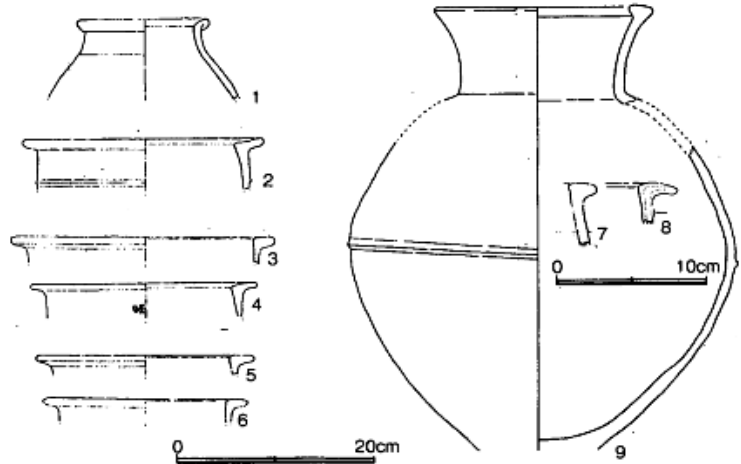
◆弥生系土器出土遺跡

\*朝鮮半島では、弥生時代中期ごろ従来の土器とは様式の全く異なる弥生土器が急増し始めるが、これは後の任那に繋がる地域へ倭人が進出した結果と見られる。(Wikipedia)



\* 亀山洞遺跡などの金海市付近では弥生前期から弥生後期の長期間に亘って弥生式土器が出土している。

\* 朝鮮半島南岸の、**靺島**では大量の弥生土器が見いだされている。弥生時代後期になると靺島の弥生土器は減り**金海地区**（狗邪韓国＝金官国）で増えるようになる。

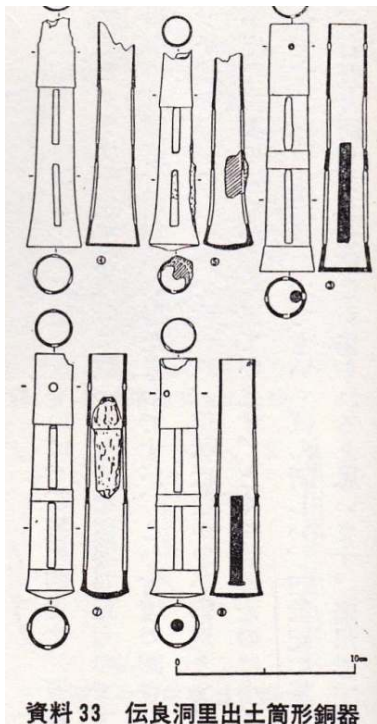


釜山市域の弥生土器及び弥生系土器（申1995）  
1～6：萊城遺跡、7・8朝島貝塚、9温泉洞遺跡

## 【古墳時代】

◆**金海 大成洞墳墓群**と**金海 良洞里墳墓群**（狗邪韓国＝金官国）の墓が代表的な遺跡

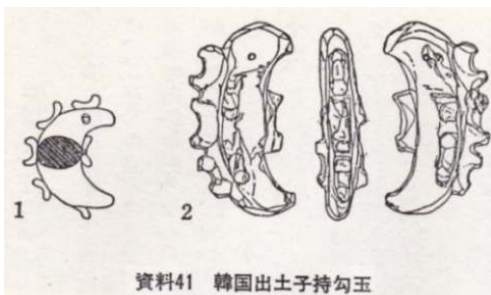
\* 筒型銅器（資料 33）   \* 子持勾玉（資料 41）   \* 直弧文をもった鹿角製の刀装具（資料 42）



資料 33 伝良洞里出土筒形銅器



資料 42 韓国出土直弧文



資料 41 韓国出土子持勾玉



金海 大成洞墳墓群・跡地に立つ筆者





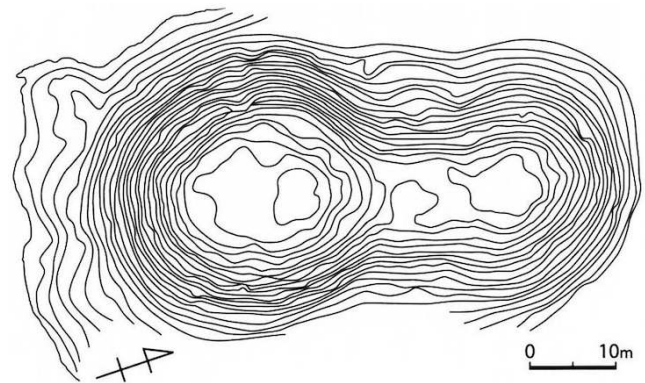
★以上のように、弥生時代～古墳時代に極めて多くの倭系遺物が出土している。単なる交流ではなく、倭人が朝鮮半島南岸部の居住していたことは間違いない。そして彼ら倭人の首長の墓も存在する。一つは金海甕棺である。もう一つは5世紀初めと推測される松鶴洞1号墳である。

## 【松鶴洞1号墳】

(Webサイト『泉城の古代日記 ユダイアリー』 より引用)

「この松鶴洞1号墳の測量図は、1914年に考古学者の鳥居龍蔵が実地調査したもので、全長66m、円径37.5mの前方後円形の古墳でした。」

### 松鶴洞一号墳



1914年の鳥居龍蔵の測量図

「ところが、現在の松鶴洞一号墳は、3基の円墳が連なった外観形状に変造されています。この変造の原因は、韓国・東亜大学校の沈奉謹教授らの発掘調査のときに変造されたのです。現在は写真のようになっていますが、中央の山は新たに盛り土して造った痕跡がうかがえるように思います。韓国の学者の多くは、朝鮮半島に日本の埋葬文化である前方後円墳があってはならないという民族主義感情が強すぎて事実を曲げてしまうようです。」



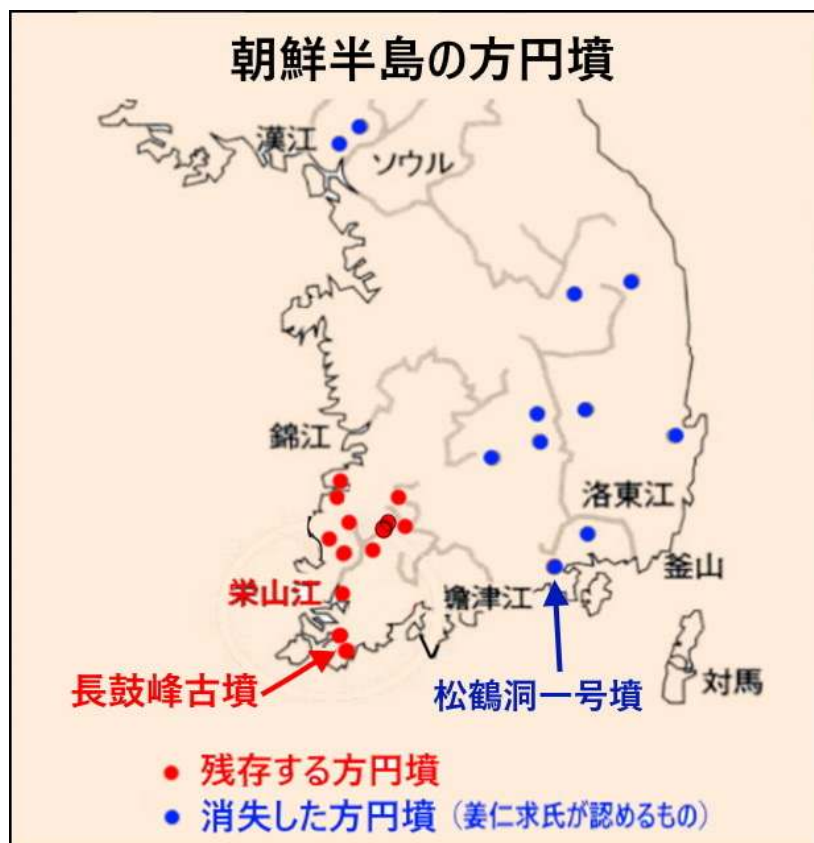
1996年の岡内三眞の写真





## 現在の松鶴洞一号墳

- ★鳥居龍蔵らによる測量図と 1996 年岡内氏撮影の写真からは、松鶴洞一号墳は前方後円墳であったことは間違いない。
- ★この古墳からは、伽耶の土器とともに日本列島産の須恵器が多数出土し、円筒形土器も出土しているとのこと。松鶴洞古墳群の固城の地は、小伽耶とされる古自国（日本書紀では古嗟国、久嗟国）にあたり。海上交通の要衝で日本列島に近い。この古墳群は5世紀から6世紀前半に築造されたとされる。現在は10基ほどの高塚が残っているが、本来は数十基の高塚が存在したものと推定される。その松鶴洞古墳群の中心に位置する古墳が前方後円墳であることは、朝鮮半島南部に倭人がいたばかりではなく、この地域の**首長は倭人であった**ことを示す。倭人が伽耶の王となっていた可能性もある。
- \*なお、姜仁求氏は他にも前方後円墳が存在したと述べられている。（下図参照）



## (2) 文字史料からわかる朝鮮半島の倭人

### ①三国史記・新羅本記『(始祖赫居世居西干) 三十八年春二月,

「(和訳文) 瓠公を馬韓に派遣して、外交関係を結ぼうとした。馬韓王が瓠公に「辰・卞(弁)二韓は我が属国だったのに、近年は貢物を送ってこない。大国に仕える礼(儀)が、これでいいのか?」と言った。瓠公という人は、その族姓は詳つまびらかではないが、元は倭人で、初め瓠を腰に吊って海を渡って来たため瓠公と称した。」

### ②魏志倭人伝と魏志韓伝

(i) 「(和訳文) (帯方) 郡から倭に至るには、海岸に従い水上を行き、韓国を通り過ぎ、南へ行ったり東へ行ったりして、その(倭の)北岸の狗邪韓国に到着する。七千余里である。」

(ii) 馬韓伝: 「(和訳文) 韓は帯方の南に在り。東西は海を以って限りとなし、南は倭と接す。」

(iii) 弁辰伝: 「(和訳文) (弁辰) 瀆盧国は倭と界を接す。十二国はまた王あり。」

(iv) 辰韓伝 「(和訳文) 国は鉄を出し、韓、濊、倭はみな従いてこれを取る。諸市で買うにみな鉄を用ひるは、中国が錢を用ひるが如し。また、以って二郡にも供給す。」

≪注≫ 最近釜山大学の調査では洛東江の南部流域で製鉄遺跡が発見され、そこから「弥生土器」が出土しているとのことである。

★以上の記述から、筆者は次のように考える。

\*まず①の記事であるが、新羅の「瓠公」は海を渡ってきた倭人ということである。伝説的なことなので、そのまま史実とは言えないが、新羅に倭人が居住していた可能性は極めて高い。

\*次に②の記事である。(i) の狗邪韓国(現金海市付近)は間違いなく倭人が住む国である。

なぜなら「從郡至倭」に始まる文で「到其北岸狗邪韓国」とあるからである。帯方郡から倭への到達点が狗邪韓国であったからである。倭の一番北の国ということである。次に(iii)の「瀆盧国は倭と接している」の記事である。瀆盧国はどのあたりかは不明であるが、弁辰十二国の一つであるので陸地の国である。その瀆盧国と接している倭も明らかに半島の陸地であり、狗邪韓国のことと考えられる。「韓が南は倭と接す。」という(ii)の記事を説明し直したものと考えられる。一方で、弁辰十二国のひとつに弁辰狗邪國が記されている。弁辰狗邪國=狗邪韓国である。ということは、弁辰狗邪國=狗邪韓国は弁辰十二国の一つであるが、倭人が住む国であったと考えられる。

最後に(iv)であるが、韓や濊と共に鉄を取りあっている倭は、離れた北部九州勢力だけとは考え難く、朝鮮半島の倭と九州との共同行動だったと推測できる。

### ③高句麗・広開土王(好太王)碑文

★この碑文は、好太王の業績を称えるために息子の長寿王が414年に建てたものであり、当時のことを刻んだ超一級の史料である。巨大な石柱の4面に記されている。欠字も多いので完全には読み取





## 幢要截盪刺倭寇潰敗斬殺無數」

(通説の和訳文)

…十四年甲辰(404年)、□倭不軌にして帯方界に侵入す……倭寇潰敗し、斬殺無数なり」

★倭に関する記事の要点をまとめると次のようになる。

- (i) 倭が(391年)に海を渡り、百済などを打ち破って新羅を臣下としたが、王は水軍を率いて百済国を討った。(百済は敗北して高句麗に下った)・九年己亥399年、百残、誓いに違ひ倭と和通す。
- (ii) 九年己亥(399年)倭人が新羅の城池を潰破し、奴客を民とした。新羅からの要請により高句麗は新羅を救うために軍を派遣した。倭は新羅城から退却して、高句麗軍は任那加羅の城を帰服させた。ところが安羅戎兵が新羅城を抜いて倭寇が城内を潰した。
- (iii) 十四年甲辰(404年)、□倭不軌にして帯方界に侵入した。……高句麗軍は無数の倭兵を惨殺した。

### 【考察】

\*まず、(i)の「399年、百残、誓いに違ひ、倭と和通す。」であるが、此れと同じ内容が『三国史記・百済本紀』に記されている。百済の阿莘王[392~405]の時代、百済は395年高句麗に大敗するが、「397年、王與倭國結好 以太子腆支爲質」と記す。日本書紀にも「一百済記に述べているのは、枕弥多礼、支侵、谷那、幌南、東韓の地を奪われた。このため、王子の直支を天朝に遣わして、先王の好を修好した。(注記：和睦のために王子を人質に入れた。)」と記されている。阿莘王の太子である腆支を人質としたことは、百済史料だけに記されているものである。ヤマト王権が腆支を人質にしたのなら、雄略時代の昆支王のように日本書紀本文に記されたはずである。

(これに関しては別の機会に詳しく述べる予定である。)

\*次に(ii)(iii)の「倭兵が帯方郡に進出して高句麗と戦ったこと」は、日本書紀の神功~応神紀に全く記されていない。

\*399年倭人が新羅城を占領したと類似のことが、日本書紀・神功紀に記されているが、その記事は、おそらく三国史記・新羅本紀の元資料を元にして創作したものと考えられる。

(これについては、④の三国史記・新羅本紀の項で解説する。)

\*高句麗が倭と戦ったとき、背後をついて占領した「任那加羅の従拔城」は倭軍の拠点であったことは間違いがない。つまり倭軍には朝鮮半島の倭人が含まれていたのである。倭軍の援軍として安羅戎兵が共同して高句麗と戦ったことも、朝鮮半島の倭兵であることを補強する。

また、「倭国が辛卯の年(391年)に海を渡り、百済などを打ち破って新羅を臣下とした」との記述からは、北部九州からも派兵していたことになる。一方、399年・400年・404年と連続して戦ったことは、遠く離れた奈良盆地のヤマト王権にこのような対外戦争の派兵が出来るはずがない。

★以上の考察より、碑文に記された倭とは、ヤマトの倭ではなく、任那加羅などに居住していた倭人

と北部九州の倭人であったのである。このことは、次に記す新羅本紀からも補強される。

#### ④三国史記・新羅本紀

★朝鮮の史料『三国史記』が編纂されたのは12世紀であるが、日本書紀・神功紀の新羅征服の記事は、新羅本紀の内容を改変したものであることがわかる。つまり8世紀以前に、三国史記・新羅本紀の元になった史料が存在したことは間違いない。よって、新羅本紀はそれなりの史実を反映したものと考えられる。その新羅本紀には倭人の侵攻の記事が極めて多く記されている。特に新羅の建国以前にあたる「辰韓の斯盧国」の時代のものも多い。全て真実とは思われないが、倭人が斯盧国や新羅に侵攻していたのは事実と考えられる。以下に主な記事を和訳文で記す。

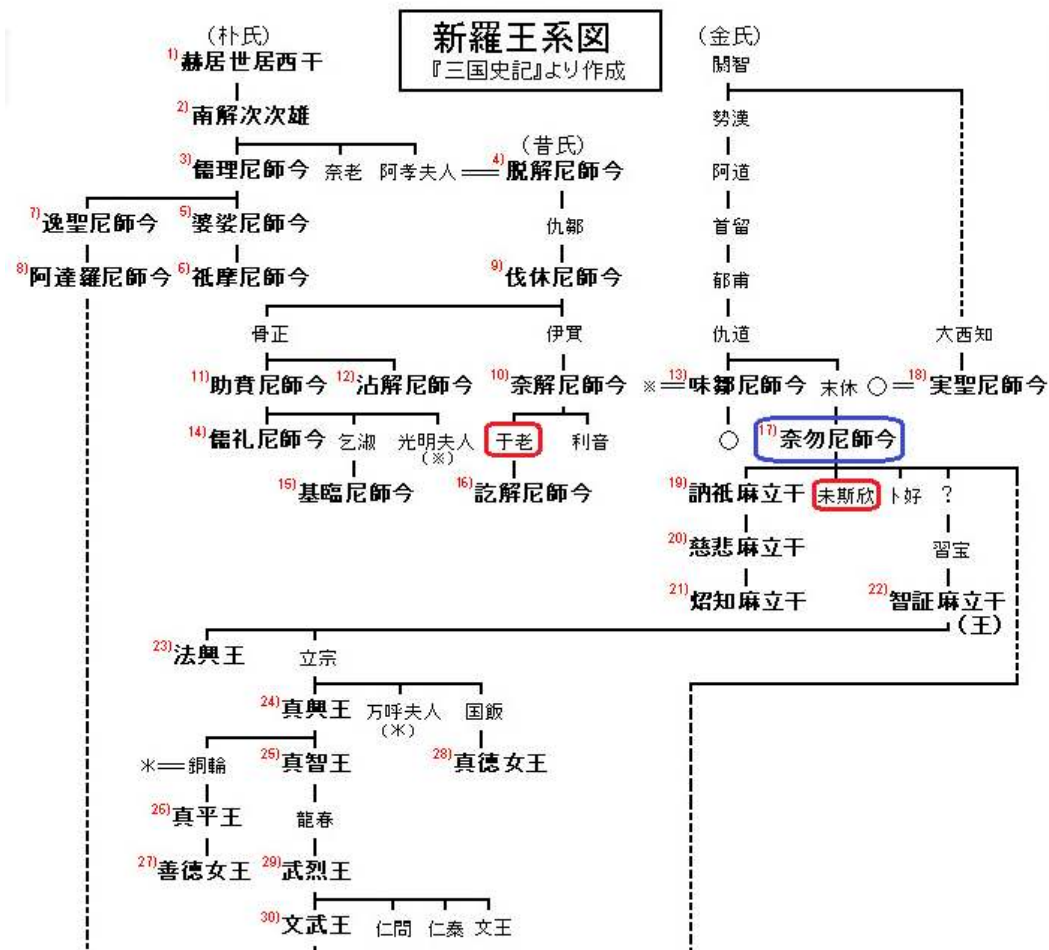
\*助賁尼師今三年(232年)夏四月:「倭人が金城を包囲した。」

四年 「倭兵が東辺を攻めた。」

同年秋七月 「伊飡の于老が沙道で倭人と戦った。」

\*沾解尼師今三年(249年)「夏四月倭人が于老を殺した。」

(注: 于老の子は、十六代王の訖解尼師今(在位:310年 - 356年)で、次の17代王奈勿尼師今(在位:356年 - 402年)の時代に新羅が初めて中国文献に記される(377年、高句麗に随伴して前秦に朝貢をしたことや、国名を斯盧から新羅に改めている。) 訖解尼師今までの絶対年代は疑わしいが、新羅が建国する以前にも倭が頻繁に斯盧を盟主とする辰韓に侵攻していたのであろう。なお、于老の姓は新羅の3つの王族の姓のうち、倭人につながる昔氏である。



\* 儒禮尼師今九年（292年）夏六月「倭兵が沙道城を攻め落とす。」

十一年（294年）夏「倭兵が長峯城を攻めて来た。」

十二年 295年春「王が臣下に向かって『倭人が、しばしばわが城邑を侵して来るので、百姓が安じて生活することができない。私は百濟と共に謀って、一時海を渡って行って、その国（倭）を討ちたいが、皆の意見はいかがか?』ときいた。これに対して、舒弗郡、弘権が『われわれは海戦に不慣れでございます。冒険的な遠征をすれば、不測の危険があることを恐れます。いわんや百濟は偽りが多く、常にわが国を呑み込もうと野心をもっておりますから、かれらと共に謀ることは困難だと思います。』と答えた。王はこれを聞いて『それもそうだ』といった。」

\* 基臨尼師今三年（300年）春正「倭国と使者を派遣しあつた。」

\* 訖解尼師今三年（312年）春三月「倭国の国王が使臣をつかわして、息子のために求婚したので、  
王は阿飡の急利の娘を倭国に送った。」

三十五年 344年春二月「倭国が使者をつかわして、婚姻を請うたが、すでに以前に女子を嫁がせたことがあるので断つた。」

三十六年 345年二月「倭王が、書を送って国交を断つてきた。」

三十七年 346年「倭兵が風島に来て、進んで金城を包圍して攻めて来た。」

★ 于老の殺害事件の後、新羅の女と倭王との婚姻により、一時的な和平が結ばれたようである。しかし、2度目の求婚を新羅が断つたことにより、倭国は再び新羅を攻めることになる。  
一次の奈勿尼師今時代以降が新羅の建国からの歴史時代になる。 —

\* 奈勿尼師今九年 364年「倭人は多数をたのんで、そのまま直進して来る所を伏兵が起つてその不意を討つと、倭人は大いに敗れて逃走した。」

三十七年 392年春正月「高句麗に使いを出して伊飡の子の實聖を人質として送った。」

三十八年 393年「倭人が来て金城を包圍し、5日も解かなかった。」

\* 實聖尼師今年 402年三月「倭国と通好して、奈勿王の子、未斯欣を人質として倭に送った。」

★（訖解尼師今と次の實聖尼師今の時代が、広開土王の時代である。記述の内容は広開土王碑文とおおよそ合致する。

四年 405年夏四月「倭兵が明活城を攻めた。」

六年 407年春三月「倭人が東辺を侵し、夏六月にまた南辺を攻めた。」

七年 408年 春二月

「王は、倭人が対馬島に軍營を設置し、兵器・武具・資財・食糧を貯え、我が国を襲撃することを企てているとの情報を手に入れた。倭兵が出動する前に、精兵を選んで兵站をしようと考えたが、舒弗郡の未斯品曰く『兵は凶器であり戦は危険な事です。ましてや大海を渡って他国を討伐し、万が一に勝つことができなければ、後で悔やんでも仕方ありません。』王はこの意見に従った。」



- \* 訥祗麻立干二年 418 年春正月 「堤上が高句麗から人質であった王弟のト好を連れて還った。」
- 同年秋 「堤上が、人質であった未斯欣を倭国から逃げさせた。堤上は倭人に殺された。」
- 一上の未斯欣の帰還記事は新羅本記・列伝に詳しく記されている。また、日本書紀・神功紀にも改変されて記されている。 —
- 十五年 431 年 「倭兵が、東の辺境に攻めて来て、明活城を包囲したが、功なくして退いた。」
- 二十四年 440 年 「倭人が、南の辺境に侵入。夏六月にまた東の辺境を攻めた。」
- 二十八年 444 年 夏四月 「倭兵が金城を十日包囲して、食料が尽きて帰った。」

## 【考察】

### 《広開土王碑との関係》

- \* 倭人が来て金城を包囲し、5 日も解かなかったこと・未斯欣を人質としたこと
  - = (碑文) 「倭国が辛卯の年 (391 年) に海を渡り・・・新羅を臣下とした」
- \* 實聖を高句麗に人質として送ったこと
  - = (碑文) 新羅が高句麗に支援を求めた。
- \* あえて記載しなかったが、碑文の「倭人が新羅の城池を潰破し、奴客を民とした」にあたる記事も新羅本紀に記されている。
- このようなことより、新羅本紀の記事はそれなりに事実を伝えていると考えられる。

### 《日本書紀・神功紀との関係》

- ★ 未斯欣を人質としたなどについては、ことは、日本書紀には次のように記している。
  - 「仲哀 9 年：皇后がもっておられて矛を新羅王の門にたて後世への印とした。その矛は今も新羅王の門にたっている。波沙寝錦（第 5 代王・婆娑尼師今）は微叱己知波珍干岐（未斯欣）を人質とした。一ある説によると、新羅王宇留助富利智干（于老）はお出迎えしたて頭を地につけて・・・」
- ・ 新羅本紀の、「第 5 代王・婆娑尼師今」と「未斯欣」と「于老」の 3 人はそれぞれ年代が異なる。それを日本書紀では、同じ新羅征服のときに登場させている。
- ・ また、「未斯欣の帰還」と「于老の殺害」についても、新羅本紀と細部までほぼ同じ内容が、神功 5 年の記事に、倭国に都合よいように改変されて記されている。
- ・ 一方、古事記には神功王後の新羅制圧は記されているが、新羅本紀に登場する人物は一切記されていない。つまり、倭人が新羅を制圧したことは、渡来人などからヤマトに伝承されていたが、「未斯欣の人質とその帰還」と「于老の殺害」などの諸事件はヤマトの人たちには伝承されておらず、日本書紀の編纂者は新羅本紀の元資料を参考にして、神功紀を創作したのである。

### 《倭軍の本拠は北部九州》

- ★ 新羅本紀の多くの記事から倭軍の本拠地は北部九州であることがわかる。

\* 侵攻の時期がほとんど春夏の3月～6月である。

海が荒れている秋～冬は対馬海峡や朝鮮海峡を渡るのは危険である。

\* 儒禮尼師今十二年（王のが語った言葉）「一時海を渡って行って、その国（倭）を討ちたいが・・・」

\* 實聖尼師今七年 408年の記事「王は、倭人が対馬島に軍営を設置して・・・という情報を手に入れた。」

倭は、海を渡ったところで対馬に近いところとしてよいだろう。

實聖尼師今時代に人質となった末斯欣と倭王が居たところも、

対馬に近いところ（玄界灘沿岸）であるように記されている。

\* 訖解尼師今三年（312年）「倭国の国王が・・・息子のために求婚したので、

王は阿漚の急利の娘を倭国に送った。」

三十五年 344年春二月「倭国が・・・婚姻を請うたが、すでに以前に女子を

嫁がせたことがあるので断った。」

「阿漚の急利の娘」とその名も記している。「末斯欣の帰還」と「于老の殺害」が史実なら、新羅と倭国の通婚の記事も史実としてよいだろう。ヤマト王権が成立してまもない4世紀に、新羅の女を遠く離れたヤマトの大王が妃にしたことはあり得ない。新羅の女と婚姻関係を結んだ倭の王は、北部九州の倭の王であることになる。

日本書紀には、「末斯欣の帰還」と「于老の殺害」の記事とは異なり、この通婚のことは記されていない。日本書紀編纂者は、天皇（大王）の妃が新羅の女であったようなことは認めたくなかったのであろう。



★ただ、新羅侵攻は北部九州の倭だけなら難しい。これまで朝鮮半島に倭人が居住していたことを明らかにしてきた。朝鮮半島の倭が北部九州の倭人と共同して新羅に侵攻していたのである。そのこ

とは新羅本紀の次のことからわかる。

- (A) 頻繁に新羅を攻めていること (B) 長期間ではなく短期間で直ぐに退いている。
- (C) 提上は末斯欣を救い出すため(新羅の海岸の)栗浦から倭に向かい、提上の妻と別れてから **ただちに倭に入っている。**(倭と新羅とは接しているほどに近いことになる。)

★金官国(狗邪韓国)や安羅国などに居住していた倭人が新羅侵攻に加わっていたのは間違いない。新羅侵攻の目的はよくわからないが、その目的は、想像でしかないが、新羅の鉄資源や物資や民を奪うことだったと考える。

## 【倭とは倭人語などを話し同じ文化を共有する人々のこと】

★以上、第2章では、(i) 考古学から朝鮮半島に倭人の痕跡が多く存在すること、そして「魏志倭人伝と魏志韓伝」・「広開土王(好太王)碑文」・「三国史記・新羅本紀」の3つの史料の検証から、(ii) 朝鮮半島に倭人が居住していたこと、(iii) 新羅に侵攻していた倭軍の本拠地は、奈良盆地ヤマト王権ではなく、北部九州であったことを明らかにしてきた。

そこで問題なのは倭・倭人・倭国とは何者かということである。詳しい解説は別の機会にするが、倭人とは、現在の日本語の元になる言葉を話すなどの共通する文化をもつ人々のことで、朝鮮半島南部や北部九州から列島の関東まで広く居住していた人々であったと推測できる。稲作などをもたらした渡来系弥生人と在来の縄文人とが融合した人々を祖先とする集団のこととあったと考える。

★倭国といえばヤマト王権を連想して各地を支配していたように思う方がおられるが、決してそうではないことが中国文献よりわかる。

\*漢書・地理志には「倭人は分かれて百余国」と記す。

\*魏志倭人伝には「三十国が魏と通交し、東にも倭種が居る」と記す。

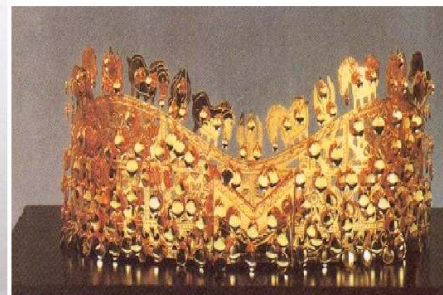
★3世紀には、馬韓55国辰韓12国と同様に倭は多くの国邑に分かれていた。4世紀に成立したヤマト王権も、列島各地域や諸豪族の連合体であった。ヤマトが各地を中層集権的に支配したのではなく、列島各地の倭人の国が緩く連合して、ヤマトの大王はあくまでも連合の代表だったのがある。筑紫・吉備・出雲・丹波・越・尾張・東国などに地域王国が存在していたのである。



福井県二本松山古墳出土



群馬県金冠塚古墳出土



茨城県三昧塚古墳出土



★地域王国の王冠と推測されるものが、ヤマトから離れた各地で王冠が出土している。

福井県二本松山古墳、群馬県金冠塚古墳、茨城県三昧塚古墳、香川県王墓山古墳、滋賀県鴨稻荷山古墳、などの5・6世紀ころの古墳から出土した**金銅製王冠**である。各地に首長（地域の王）が存在していた証拠である。

★記紀の記述もそれを補強する。継体大王は越や近江を自地盤とする地域の王であったし、継体大王が即位以前に尾張氏の女を妃にしていたことは、尾張氏と連携していたことがわかる。

よって、本章で述べた時代（4世紀末から5世紀）にも倭は各地に地域王国が存在していたのである。朝鮮半島の倭もその地域王国の一つであったと考えられる。彼らの末裔が後の欽明紀に記す任那日本府の人々であったと、筆者は考えるのである。以上の考察を元にして、日本書紀に記す「任那日本府」の実像を探ることにする。

## 3. 「任那日本府」の実像を探る

### (1) 雄略紀～顕宗紀までの任那での倭人の活動

★日本書紀の任那記事は崇神紀と神功紀にも記されているが、これらは創作の可能性が高い。それなりの伝承があると考えられるのは雄略紀からであり、継体・欽明紀には極めて多く記事が記されている。以下に重要と思われる記事のみを要約して、筆者の考察をつけて記すことにする。

(a)雄略8年：「**高句麗が兵をおこした。そこで新羅王は任那王へ人を遣わして、『どうか助けを日本府の將軍たちをお願いします。』**といった。」

\*この時代は新羅が高句麗の支配から脱しようとするときである。雄略時代は百済とヤマト王権の通交が出来ていたときで、新羅が伽耶諸国や倭人に助けを求めたことが、百済を通じて伝わっていた可能性がある。

一方、この記事が日本府の初出である。「日本」という国は存在しなかったので、「倭府」というになる。弥生時代以前から朝鮮半島に倭人が居住していたので、**朝鮮半島に倭人たちの何らかの組織が存在したことは事実**であろう。しかしそれはヤマト王権とは直接の繋がりはない朝鮮半島の倭人たちの組織と推測できる。ヤマト王権の出先機関ではあり得ない。そのことはこれ以降の記事からわかる。

(b)雄略9年(5世紀後半)「**天皇は新羅を討とうと思われた。紀小弓宿禰、蘇我韓子宿禰、大伴談連、小鹿火宿禰らに『……汝等四卿を大将に任ずる。王師をもって攻め討ち天罰を加えよ。』**といわれた。紀小弓宿禰は進撃が目ざましかったが病気になって死んだ。紀小弓宿禰の子の紀大磐宿禰は父の死後新羅へ行き、小鹿火宿禰が掌っていた兵馬・船官などを奪って自分勝手に振る舞った。」

顯宗3年（5世紀末）

「紀生磐宿禰は任那から高麗へ行き通い、『三韓の王』たらんとして官府を整え自ら神聖と自称した。任那の左魯・那奇他甲背たちが策謀して、百済の適莫爾解を爾林で殺した。百済の王はとても怒り、軍隊を率いて帯山に行き、攻めた。生磐宿禰は軍隊を進めて逆に迎え撃ったが、武器は尽き枯れたので任那へ帰った。これに百済国は佐魯・那奇他甲背たち300人あまりを殺した。」

★紀大磐（生磐）宿禰はヤマトの指示には従わず自立しているようである。「三韓の王」たらんとしたことは史実とは思われないが、「自分勝手に振舞った」ことは事実であろう。ヤマト王権のためではなく、紀氏一族のために行動していたと推測される。

和歌山から大阪府最南端の淡輪古墳群から和歌山の岩橋千塚古墳群や馬冑で有名な大谷古墳などは、紀氏一族の墓である。大谷古墳から出土した馬冑からは朝鮮半島で活動していた考古学の証拠である。なお、このとき百済に殺された「左魯・那奇他甲背」は後の安羅の日本府の「佐魯麻都」の先祖である。



《筆者撮影》（大阪府泉南郡岬町淡輪）  
紀小弓宿禰の墓と推定されている  
淡輪古墳群最大の西陵古墳

## (2) 継体時代における任那記事とその考察

★ここからが、本拙文の主題である「任那諸国が新羅に併合されることになった原因とその経緯」を探ることにする。

(c) 継体6年(511年)、「穗積の押山を百済につかわした。百済が使いを送り・・・別に上表文をたてまつった。任那国の四県（上哆唎・下哆唎・娑陀・牟婁を欲しいと願った。哆唎国守の穂積の押山が賛同して、大伴金村も、意見に同調して奏上した。）そして任那四県の割譲、となる。」

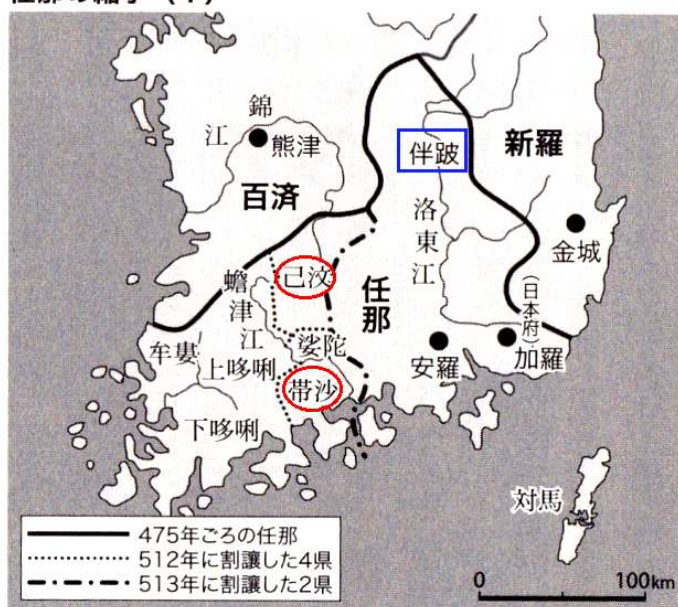
継体7年：「百済は文貴將軍を遣わして、穂積臣押山に副えて、五経博士段揚爾を奉った。」

★任那4県を百済に割譲したことはある程度の事実と考えられる。柴山江流域の前方後円墳が、

この時代以降築かれなくなり百済系の墓になることがそのことを補強している。ただしヤマト王権が伽耶諸国（広義の任那）を支配していたのではない。伽耶諸国が、それぞれ独立していたことに疑う余地はない。それらの伽耶諸国に対して、倭国は宗主国的に影響力をもっており、それぞれの王権を保障していたと推察できる。馬韓が百済に辰韓が新羅にまとまったこととは異なり、弁韓がまとまらなかったのは、倭国が伽耶諸国のそれぞれの独立を保障してからと推測できる。任那の4県の百済への割譲とは、4県に対する倭国の宗主権を放棄して百済領になることを認めたということである。その見返りとして百済の先進文化を取り入れることだったと推測できる。翌年に五経博士段揚爾が来倭していることからわかる。

★4県の割譲は、当時金官国に替わり伽耶諸国（任那諸国）の盟主であった伴跋国（高霊？）を怒らすことになったのである。任那滅亡の始まりである。

任那の縮小（1）



山田宗睦訳『原本現代訳 日本書紀』ニュートンプレスより

「大平裕『知っていますか、任那日本府』  
PHP研究所 2013』より

(d) 継体7年冬11月：「己汶・帶沙（上図）を百済国に与えた。伴跋国は己汶の土地を求めたが与えなかった。」

継体8年：「伴跋は城を小呑と滯沙に築いて、日本との戦いに備えた。・・・」

継体9年：「百済の文貴將軍らが帰国のときに、物部至至連を副えて遣わされた。物部連は滯沙江に赴いた。伴跋国は軍を興して攻めて来た。物部連は命かながら逃げた。百済は物部連をねぎらった。」

継体10年：「百済は五経博士漢高安茂をたてまつって、五経博士を段揚爾から漢高安茂に替えたいと願ったので、交代させた。」



★任那4県だけでなく、己汶・帶沙を百済に与えたことは、任那諸国が怒り倭国に失望するのは当然である。ヤマト王権は、伽耶諸国の独立よりも百済文化を取り入れることを優先したのである。これ以降十数年、なぜか任那記事は見られない。

継体12年(518年)：山背乙訓に都を移した。

継体17年、百済の武寧王が逝去した。

継体20年(526年) 都を大和磐余玉穗宮に遷した。

継体21年(527年)：磐井の乱

(e)継体23年(529年)：多沙津(蟾津江河口の港)を百済王に賜った。加羅(南加羅=金官国)は新羅と結んで日本に恨みを構えた。加羅王は新羅王の娘を娶って息子が生まれた。新羅は三つの城、ついで北の堺の五つの城も取った。近江毛野臣が安羅に遣わされた。南加羅、喙己吞を再建させようとした。・・近江毛野臣は新羅と任那を和解させようとするが、失敗した。(詳しく記されているが省略する)新羅は金官など四つの村を掠めた。」

継体24年(531年)：任那王(阿利斯等)は毛野臣がつまらないことばかりして、任那復興をしないことを知り、・・・阿利斯等は謀反の気持ちを興した。この年、毛野臣は召されて、対馬で死んだ。(毛野臣は故郷のお近江に葬られたとする。)

★多沙津を百済に与えたことは、伽耶諸国の倭国からの離反は決定的になったと推測できる。この時期、南加羅(金官国)は新羅に呑み込まれていたもので、この日本書紀の記事は潤色されていることは間違いない。ただ、安羅の高堂で何らかの会議が行われたのは事実であろう。

★任那王(阿利斯等)についても、倭国に来たことなど事績が多く記されている。どこまでが真実かはわからないが、「新羅王の娘を娶って息子が生まれた」「阿利斯等は謀反の気持ちを興した。「新羅は金官など四つの村を掠めた」は事実を元にしてしていると考えられる。

(注：三国史記・新羅本岐では、次のように記している。)

522年 金官伽耶国王仇亥が新羅法興王に花嫁を求めてきた。(仇亥王の妻)

524年 金官伽耶国王が新羅に来て同盟関係を結んだ。(任那を新羅に統合するための条件を詰めた)

532年 金官国王「金仇亥」が王妃及び3王子(奴宗、武徳、武力)を連れ国の財物・宝物を持参して新羅に投降した。新羅王は彼らを礼式に従った待遇をして上等の位を授け本国を食邑として与えた。

★毛野臣の事績が詳しく記されているが、脚色されたものであろう。「任那復興が出来なかったこと」「阿利斯等は謀反の気持ちを興したこと」「南加羅の4つの村を掠め取られたこと」などが毛野臣の失敗が原因であるように記している。事実はそうではなく、百済や新羅の思惑もあり、毛野臣による調停は不可能だったのである。毛野臣はそれなりに尽力したが任那(金官国)は既定どおり新羅に併合されることになったのである。

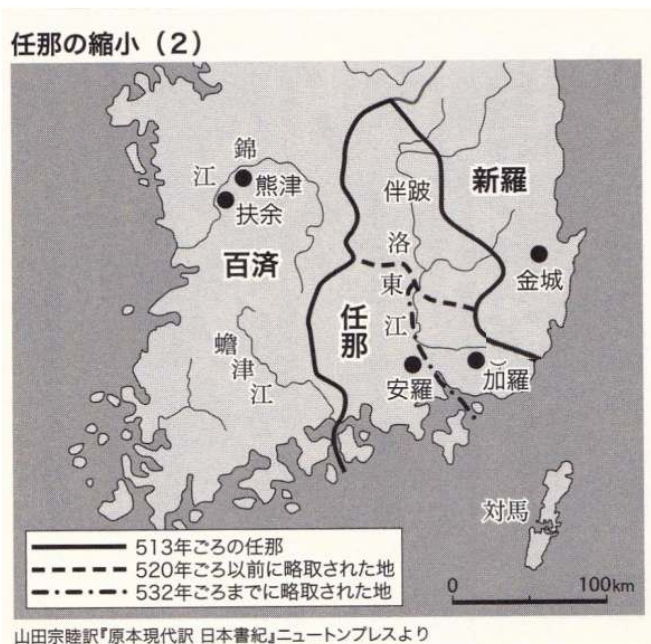
★毛野臣が死んだ翌年の継体 25 年 (351 年) 継体大王が亡くなり、安閑・宣化・欽明時代になる。

(筆者は安閑・宣化は即位しておらず、欽明が 531 年に即位したと考えている。これについては改めて述べる予定である。)

《備考》宣化 2 年「新羅が任那に害を加えるので、大伴金村に命じて、その子磐と狭手彦を遣わして、任那を助けさせた。」との記事がある。これは一種の伝説で創作の可能性が高い。というのは、大伴狭手彦は欽明 23 年にも大將軍として高句麗を討ったと記されている。これらの記事は大伴氏の家伝に、「大伴狭手彦が朝鮮半島に渡った」という何らかの伝承があり、それを改変して日本書紀の編者が記載したと推測する。)

### (3) 欽明紀の任那関係記事とその考察

★欽明時代になると、任那復興会議が 2 度開催されるなど、任那復興関係の記事が極めて多く記される。ところで、日本という国は当時まだ存在しなかったので、「日本府」も虚偽である。おそらく倭人組織の「倭府」のようなものだったのであろう。ここでは、そのことを理解した上で「日本」という言葉を便宜的に用いることにする。



「大平裕『知っていますか、任那日本府』  
PHP研究所 2013」より

(f) 欽明 2 年四月《第一回任那復興会議》

「安羅、加羅、多羅、などの任那の早岐らと任那日本府の吉備臣が百濟に行った。そのとき、聖明王は任那の早岐らに語った。『・・今、新羅に欺かれ、天皇を怒らせ、任那で恨まれるのは寡人自分の過失だ。』」

★本当にこのように聖明王が語ったか疑わしい。百濟の政策に天皇 (大王) が怒るようなことは

なかったはずである。任那が恨んだのも百済ではなく、むしろヤマト王権だったと考えられるからである。任那問題の責任が百済にあるとしたい日本書紀の虚偽記載と考えられる。

「聖明王は語った『日本の天皇の意志はもっぱら任那の回復を図りたいということである。どのような策によって再建できるだろうか。』」

任那の早岐らが聖明王に答えて『新羅と話し合いましたが、まだ返事がありません。・・任那は新羅と接していますので、卓淳らと同じ滅亡の運命にさらされないかということです。』と禍を恐れた。聖明王は『・・喙己吞は新羅との境にあった。ひっきりなしに攻められて敗れた。任那も助けられなかった。南加羅は小さく狭く、俄に備えることが出来ず、・・それで滅んだ。卓淳は上下が離れ離れで、国王自ら新羅に内応した。それで滅んだ。自分がお前たちと力を合わせ、天皇の威を頼れば任那はきっと復興出来る。』と語った。」

\*同年11月「百済は、安羅の日本府が新羅と通じ合っていることをきいて、・・任那の執事を召して任那の再建を図らせた。また別に安羅の日本府の河内直が計を新羅に通じたことを深く責め罵った。一百済本記によると加不至費直・阿賢移那斯・佐魯麻都たちとあるが詳細は分からない。」

★任那復興会議は百済が主催しているのである。百済は、残りの任那諸国が新羅に併合されることを阻止して、あわよくば百済に併合しようとしていたと考えられる。欽明王権はそれほど任那に執着していないようである。安羅の日本府が新羅と通じ合っていることは、欽明王権の力が日本府に対して全く及ばなくなっていたことを示す。つまり、ヤマト王権は任那に対する影響力宗主的な影響力を既に喪失していたのである。

喙己吞・南加羅（金官国）・卓淳が新羅に併合された理由を記している。おそらくそのようなことだったのだろう。しかし、根本的な理由は任那諸国がヤマト王権に失望して、強大化した新羅を頼りにするようになっていたと考えられる。





(g) 欽明4年：11月：「(天皇は) 津守連を遣わし百済に対して詔した。『任那の下韓にある百済の郡令・城主は日本府につくべし・・・『任那を建てるようにと言われて十余年になる。任那は汝の国の柱である。・・・早く復興したら河内直らが引き上げることはいうまでもない。・・・』と百済の三人の佐平たちは『下韓にある我らの郡令・城主を出すことは出来ません。』と言った。同年12月「聖明王は『河内直、移那斯・麻都らがいつまでも安羅にいるなら任那再建は難しい・・・』と言った。」

★欽明王権は、任那を懐柔するために「百済に割譲した下韓を日本府に戻すこと」を求めたのであるが、百済は断ったということである。

(h) 欽明5年1月〈第二回任那復興会議〉

「百済は任那の執事と日本府の執事を呼んだが執事を送らず低いものを送った。それで復興をはかることができなかった。・・・百済の使者は、日本府と任那の早岐たちに語った。

『・・・津守連は(天皇の) 詔勅を読み、任那の復興の策を問おうとして、日本府・任那の執事を招集する使者を三回派遣しましたが、執事たちは来ませんでした。それで任那の政治を計り論じて、天皇に申し上げることが出来ませんでした。』と語った。

それとは別に百済の使者は河内直に言った。

『昔から今に至るまで、ただお前からは悪いことしか聞いていない。お前の先祖たちも奸計・嘘で誘い説いて騙した。・・・任那に留まり、常に不善をなしてきた。任那が日々損なわれたのは、すべてお前に原因がある。一百済本記によると、『先祖是那干陀甲背・加獵直岐甲背という。または那奇陀甲背・鷹奇岐弥という。』一』

★この「那奇陀甲背」は顯宗紀に百済に殺されたと記す「佐魯・那奇他甲背」であり、佐魯麻都の祖父であると考えられる。「任那が日々損なわれた原因」がヤマト王権にあるのに、河内直にあるとは、とんでもない責任転嫁である。

「また、百済の使者は日本府の卿・任那の早岐たちに言った。

『任那の復興には天皇の威を借りなければならない。・・・一カ所に集まり可否を論じたい・・・』これに対して日本府は語った。

『任那の執事は招集しても来ないのは、私が派遣していないからで、来ることができないのです。任那王は『日本府の卿が出ることを許さないのです。』と弁明した。』

★百済が任那と日本府は、復興会議に対する召集に対して、適当にあしらってある。日本府や任那王にとって、任那の復興などは出来るはずがないと考えていたのであろう。

(i) 同年3月「百済の許勢奈率奇麻や物部奈率奇非らは上表して語った。

『・・・任那が復興会議に呼ぶのに来ないのは、その本意ではないのです。移那斯と麻都の奸計の徒がするところなのです・・・任那は安羅を兄として、その意に従うのです。安羅の人は日本府

を天とします。―百濟本記によると、安羅をもって父とし、日本府を本とするとある。―  
いま、的臣、吉備臣、河内直は、みな移那斯と麻都の指揮に従っているのみです。移那斯と麻都は身分の低い卑しい出身のもので、日本府の成務をほしいままにしています。また執事に邪魔をして行かせませんでした。・・

移那斯と麻都の二人が安羅にいて、よこしまなことを行えば、任那の復興は困難で、海の諸国は天皇に仕えることができないでしょう。・・佐魯麻都は韓腹（朝鮮半島の生まれ）といっても、位は大連なのです。

今、麻都たちは新羅に従う腹心があり、その新羅の服を着て、朝夕に新羅に往来し、密かに騙そうと準備しています。恐れているのは、任那はこれによって永遠に滅ぶことです。任那がもしも滅びれば、わたしめの国は孤立し危険です。・・伏して願います。天皇は、遥か世界を照らし、遠くまでを見て、速やかに移那斯・麻都を本国へと異動させて、任那を安らかにしてください』と言った。許勢奈率奇麻らが日本から帰ったが、河内直・移那斯・麻都については(ヤマトから)返事がなかった。」

★第二回任那復興会議はなんとか開催できたが、成果は全く無かった。任那日本府の実権は阿賢移那斯・佐魯麻都が握っていたことがわかる。許勢奈率奇麻らが来倭して上表しているが、阿賢移那斯と佐魯麻都は倭人ではあるがヤマト王権の臣下でない。彼らをヤマトに移すことなど出来るはずがない。また彼らを「悪いことばかりしている。」「よこしまである」などと記しているが、それは百濟やヤマトの要求に従っていないだけのことである。おそらく安羅や日本府のリーダーたちは、既に新羅に併合された喙己吞と南加羅（金官国）および卓淳のように、新羅に併合されるように計っていたのであろう。



日本府があった元安羅国  
「咸安 末伊山古墳群」に立つ筆者

(j) 欽明5年11月「百済は使者は、日本府と任那の執事を招集して語った。

『・・許勢奈率奇麻・物部奈率奇非たちが日本から帰って来た。今、日本府の臣と任那国の執事は、百済に来て、勅を聴いて、一緒に任那について話し合え。』と

日本の吉備臣や安羅などの任那の早岐たちは百済に行って言った。

『任那を再建することは、ただ大王（聖明王）にだけに掛かっている。王に従って共に参上して勅を聴きましょう』

これに対して聖明王は城を造るなど3つの策を提唱して語った。

『・・・吉備臣・河内直・移那斯・麻都が任那国にいれば、天皇が任那を再建しろと詔しても、出来ない。この四人を異動して、それぞれ本の邑へと派遣して帰すように天皇に申し上げよう。』と

★百済は何度も「吉備臣・河内直・移那斯・麻都などを任那から本国（ヤマト）に移動させる」ことを欽明王権に要望している。それは実現できるはずがないことは百済にはわかっていたはずである。

日本書紀の記述の信憑性が疑われる。その後、なぜか任那記事は極端に少なくなる。おそらく百済は高句麗との戦争をするようになり、任那どころではなくなったのであろう。仏教公伝など欽明王権の百済との交流は多く記されているが、任那についてはほとんど記されなくなる。

このことから、欽明王権は任那に対して何もしていなかった、出来なかったということがわかる。

(k) 欽明8年「百済は（高句麗との戦いに）援軍を乞うた。高麗の捕虜が語った『安羅国と日本府が高麗に百済侵攻を勧めたのである』と。」

欽明10年夏6月「（高句麗との戦いへの援軍の要請に来倭していた百済の將軍の）将徳久貴・固徳馬次文に対して、（欽明大王）は語った。

「移那斯・麻都が影に隠れて使者を高麗に派遣したことについて、朕は虚実を問うために使者を派遣する。」と語った

欽明13年5月「百済・安羅・加羅は中部徳木劬今敦らを遣わして、『高麗と新羅が連合して、百済と任那を滅ぼうとしています。』と伝えた。」

★これらの記事は、百済と高句麗の戦いに関して、安羅国と日本府および新羅を貶める記事であり、疑わしい。

欽明15年：聖明王が戦死する。

欽明23年562年：《任那の滅亡》

「新羅は任那の宮家を討ち滅ぼした。一ある本には二十一年に滅んだとある。一

総括して任那というが、分けると、加羅国、安羅国、斯二岐国、多羅国、卒麻国、古嗒国、子他国、散半下国、乞淦国、稔礼国、合わせて十国である。」



★その後、新羅から任那の調が献じられるようになるが、それについては省略する。

### 《考察》

★基本的に「ヤマト（欽明王権）は偉大であり、力を尽くしたが任那が滅ぶことになった・」との内容である。しかし、2度の任那復興会議は百済が主催していて、ヤマトへ何度も百済官人を派遣している。ヤマトより百済のほうが任那の復興に熱心だったのである。任那諸国を新羅に取り込まれることへの危機感は百済の方が強かったと考えられる。

★それに対して、ヤマト王権は任那がどのような状態であるか、把握できていなかったようである。大王（天皇）は詔を出しているだけで、具体的な対策はほとんど行っていない。津守連を派遣するだけで任那の復興には消極的であったと推測できる。ヤマト王権に失望していた任那諸国や『日本府の倭人たちはヤマト王権を見限っていたのであろう。任那諸国に対する倭国の宗主権的な影響力は喪失していたと推測できる。

★日本府の実権を握っていたのは移那斯・麻都であったことは「的臣、吉備臣、河内直は、みな移那斯と麻都の指揮に従っているのみです。移那斯と麻都は身分の低い卑しい出身のものですが、日本府の成務をほしいままにしています。」などの記述からわかる。彼らは現地の倭系の人物でヤマト王権の倭人ではなかった。百済が何度も彼らを（本貫に）呼び戻すように求めてもできなかった。日本書紀には、日本府の指導者であった河内直・移那斯・麻都などは悪人で、任那の滅亡の原因であるように記しているが、継体紀で述べたように、任那の滅亡の原因はヤマト王権の政策（百済に4県や己汶・帶沙を与えたこと）にある。

★「任那は安羅を兄として・・安羅の人は日本府を天とする」と記す。これどのようなことを意味するのだろうか。金官国（南加羅）が新羅に併合されてしまった当時の伽耶諸国の中で最も大きい国は安羅ではなく、高霊（大伽羅）であった。安羅が倭の影響が最も強い国であったということであろう。安羅は、現地の倭人勢力である『日本府』によって支えられていたと推測できる。つまり、安羅と「日本府」とは二重権力のような状態だったのである。安羅には首長である早岐が居るが、同時に「日本府」も存在する。広開土王碑の時代の「安羅人戍兵」は倭の援軍になっている。つまり安羅と倭（朝鮮半島の倭）とは、遅くとも4世紀後半末から継続して共同で国を運営していたのである。

河内直・移那斯・麻都などは現地生まれの倭系人であり、ヤマト王権のために動いていたのではない。朝鮮半島で彼ら倭系人が活動するには、人的経済的な基盤あったはずである。倭人か伽耶人かの区別ができないほど血縁でつながっていたと考えられる。列島各地から伽耶に移住した逆渡来人の二世三世を含む人々も居住していたのであろう。彼らは現地の倭系の人々や安羅などの任那諸国の民のために活動していたのである。

★「麻都たちは新羅に従う腹心があり、その新羅の服を着て、朝夕に新羅に往来し、密かに騙そうと準備しています。」との記事より、日本府や安羅などの任那の指導者たちが新羅に近づいていたこと

は明らかである。頼りにならないヤマト王権を見限り、生き延びる道として南加羅のように新羅に併合されることを選んだのであろう。

## 【終わりに】

任那日本府 については、戦前から様々な説が唱えられてきた。その中の一つが、ヤマト王権が任那を支配していてその出先機関が任那日本府であったとする説である。今回筆者は任那日本府について初めて検証したが、日本書紀を読む限り、到底そのような説が成り立たないことがわかった。日本府という語は何度も記されているが、**ヤマト王権の機関であるような記述は一切なく、ヤマトから独立した組織であるようにはっきりと記されている。** 任那の滅亡の前に、日本府のリーダーたちが新羅にすり寄っていたことがはっきり記されている。日本府がヤマト王権の出先機関ではなかったことは明白である。にもかかわらずなぜ、「任那日本府がヤマト王権の出先機関」であるとの説が出てくるのであろうか。まさにヤマト天皇中心歴史観からの願望的な説である。日本府という語から、ヤマト王権は任那を支配していたことにしたいという気持ち根底にあるのであろう。これまでも述べてきたが、ヤマト天皇中心史観は真実を探る障害になっている。以前朝鮮のある学者は、「任那日本府とは、朝鮮半島の三国が日本列島内に植民地を持っていたその分国である」との説を出した。この説は、朝鮮優越の民族主義に根ざす荒唐無稽な説であり全く支持されていない。それに対して、日本の「ヤマト王権が任那を支配していた。」との説は、それほど荒唐無稽な説ではないが、同様な自国を優越する民族主義からのものである。現在学会では「任那日本府がヤマト王権の出先機関であった」との説は、ようやく否定されつつある。しかし一般の古代史ファンには無意識の民族主義からか、この説を信じている人が多い。自国を愛することは重要だが、過度に自国に対する優越感をもつ似非愛国主義は歴史の真実の解明の障害になっているように感じられる。重要なことは、政治思想や民族主義思想にとらわれることなく、古代の真実を探求することである。 次回は、埼玉稻荷山古墳鉄剣に刻まれた「ワカタケル大王」と欽明大王即位の謎について述べる。

以上 了